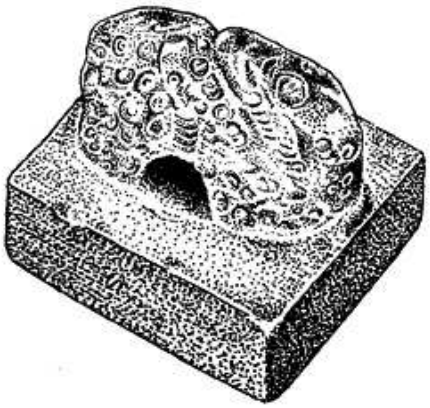
事務局 amateur スタッフによる**フォロー・アップ メモ・ランダム**

“倭人伝のクニグニ②” にて

魏志倭人伝に描かれる倭人の国の一つとして奴国があり、その特筆すべき出土遺物として‘漢委奴国王’の金印が福岡市博物館に展示されています。この金印は、天明4年(1784)、志賀島で発見され、福岡藩主の黒田家に代々伝わり藩庫に長く保管されていましたが、明治になって《国宝保存法》に基づく国宝に指定され、昭和29年に改めて《文化財保護法》に基づく国宝に指定され、東京国立博物館に委託された後、昭和54年に黒田家から福岡市に寄贈されて、平成2年10月に福岡市博物館の開館で一般公開されるようになりました。



天明4年3月16日に志賀島の百姓甚兵衛から、耕していた田んぼから金の印章を発見したという届け出が郡役所にあり、掘り出した時の経緯と、それが間違いないと添書きした庄屋武蔵、組頭吉三、勘蔵の名がある“口上書”が存在します。当時の福岡藩が《修猷館》と《甘棠館》という二つの藩校に対し鑑定を命じたところ、《甘棠館》館長の亀井南冥が“金印は後漢の建武中元2年(西暦57年)に、光武帝から下賜された品物である”と報告しました。このように口上書があり、鑑定書がある金印ですが、当初から偽造が疑われています。

疑惑の一つは口上書を提出した発見者の百姓甚兵衛の存在です。当時の戸籍とも言える、志賀島村の臨済宗東福寺派蓮台山荘厳寺の岡方過去帳には、甚兵衛の記録が無いことです。そして、鑑定書を書いた亀井南冥が、自らが館長を務める藩校《甘棠館》がライバル《修猷館》より優位に立つために画策して偽造したのではないかという説です。亀井南冥には親しい友人として、考証学者の藤貞幹、篆刻家の高芙蓉、郡奉行の津田源次郎、福岡の豪商である米屋才蔵がいて、彼らが共謀すれば偽造印を本物として認定させ、名声を得ることが可能のように思えます。また、金印鑑定で名声を博した南冥が、数年後に退役処分となっているのは、偽造が発覚されたためであり、黒田藩は恥の上塗りを避けて物証の金印は藩庫にしまい込み、全てを闇に葬り去ったと考えるのは荒唐無稽でしょうか？

実物を肉眼で見たことがない友人も、きれい過ぎるところに疑問を感じるそうです。口上書によると、溝を削って広げていたところ、二人で持たねばならないほどの大石に出くわし、それをカナテコで掘り起こして除けると金印が現れたということです。三つの石で囲った小さな空間を作り、簡単には動かない大石で蓋をしたようです。しかし、雨が降るたびに、すき間から少しずつ土砂が流れ入り、ゆっくり埋まっていったと思われます。ご存じように純金は展延性に優れ、僅か1gの金から厚さ10,000分の1ミリ、1平方メートルの大きさの金箔を作成可能です。しかし、純金の表面硬度は小さく爪で傷つけることがあるほどです。土に埋まっていた金印を掘り出すときに、擦り傷や引っかき傷が付いていないのがとても不思議です。

本物とする根拠は、江戸時代の小判などよりずっと純度が高く、中国で出土した他の金印に近いことが蛍光分析で明らかにされています。また、これらの中国出土の金印の情報は江戸時代には知られていないはずですから、印の書体などが真似られようがありません。

1956年に雲南省晋寧県の石寨山古墳六号から発掘された「滇王之印」は 、金印で蛇鈕印というこが大きく取り上げられました。中国出土のそれまでの金印に、蛇鈕印がなかったことが偽造の根拠とされていましたが、出土によって逆に本物であることの根拠となりました。また1981年に江蘇省揚州 市外から出土した「廣陵王璽」は 亀鈕ですが字体は志賀島の金印によく似ており、同一工房のものとされています。「廣陵王璽」は鑿(たがね)で文字を一気に彫り進める「線彫り」と呼ばれ高度な技法で製作されている一方、志賀島の金印は文字中心線を彫ったあと、別角度から鑿を打ち込んで輪郭を整える「さらい彫り」と言う技法が使われていると指摘され、両者の製作年代に開きがありそうです。

実物を常設展示している福岡市立博物館では、2018年に真贋論争をテーマにシンポジウムを開催しています。博物館は金印を「本物」としていますが、「研究の手法が異なれば違った見解が現れ、論争があるからこそ研究が深まり、新説も生まれます。“史実”とは何かを考え、歴史をひもとくことの魅力や奥深さを感じられれば」と開催したそうです。

夢は壊すよりあたためていた方が幸せかもしれません。地球の裏側で繰り返されている、都市や歴史や文化や命を壊す現実に比べれば・・・

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 （体裁は自由ですが、文書でお願いします）